日本における家族社会学研究の国際化に向けて

—研究論文を英語で発表するために—

石井クンツ昌子

要 約

日本の家族社会学には優れた研究が多い。しかしこれらの多くの研究は日本の学会主催の大会あるいは日本語の学会誌のみで発表されるために海外での認知度は非常に低いのが現状である。現在まで家族社会学研究者は英語圏の論文をたくさん読んだり、海外から招聘される研究者の講演を聞いたりするなどの「受動的」な国際化は十分にしてきたと思う。今後期待すべきことは自分たちの研究を英語で書き、海外の学会で発表し、英語圏の雑誌に掲載することではないだろうか。本稿では日本家族社会学会 2006 年度大会の国際セッションで取り上げた内容を中心に英語の研究論文を書くこと、海外の大会で発表すること、そして英語圏の雑誌に投稿して載せることなどについてさまざまな例を示しながら説明する。

キーワード: 英語研究論文, 大会参加, ジャーナル投稿

2007, 家族社会学研究, 19(1): 42-54

Toward Internationalization of Japanese Family Sociological Research: How to Present Research Papers in English

Masako Ishii-Kuntz

Abstract

Japanese family sociology has produced many excellent studies over the years. However, because many research papers are presented only at professional meetings in Japan or published in Japanese language journals, they have not been widely recognized outside of Japan. Numerous Japanese researchers have been engaging in passive “internationalization” by mainly reading articles published in English language journals. What Japanese family scholars are expected of today is to present their research at overseas conferences as well as publish them in English language journals. This paper expands my presentation in International Session at annual meetings of Japan Society of Family Sociology in 2006 by focusing on writing research papers in English, presenting them at overseas conferences, and publishing in English language journals.

Key words: English research paper, conference participation, journal submission

2007, Japanese Journal of Family Sociology, 19(1): 42-54

このような受動的な国際化を超えて、日本の家族社会学研究を海外へ発信するという能動的な国際化をどのようにしたらいいのかということを紹介し説明する意味で大会でのセッションを提唱した。ちなみにアメリカの全米家族関係学会 (National Council on Family Relations, NCFR) では毎年の大会で “How to publish your research in family journals” というセッションを開催していて若手の研究者をはじめとする参加者が多く非常に役に立つ実用的な内容が盛り込まれている。本稿では筆者が企画した国際セッションで取り上げた内容をもとにさらにさまざまな情報

- 1) 研究紹介 (Introduction): 研究の意義と目的 (Significance と Objectives)
- 2) 先行文献のレビュー (Literature Review)
- 3) 調査法 (Methods): サンプルング (Sampling), サンプル属性と特性 (Sample Characteristics), 変数測定方法 (Meas-

5) 結論, 考察, インプリケーション (Conclusion, Discussion, Implications)

[例 1: 研究の意義]

「例 2: 研究の目的: 質問形式型」

「例3: 文献レビューのまとめ」

日本の家族社会学研究では先行文献の部分が比較的短く、極端な例では文献レビューをIntroductionの部分にまとめて入れたものとか仮説をリストアップしながら先行文献をごく短く述べたものもある。英語での文献レビューの場合は、このようなことを避けて、どのような先行文献があ

[例 4: 変数測定説明の文章化]

[例 5: わかりにくい vs. わかりやすい結果説明]

わかりやすい例 Those husbands who hold liberal gender ideology are significantly

も “Fathers’ Child Care Participation and Children’s Sociability” のような直接的な論文名にしたほうが良い。

「家族社会学研究」や他の日本語の雑誌の英文要約査読を経験して感じたことは直訳された文章は英語として不自然な場合が多いということだ。そこで要約に限らず英語の研究論文を執筆する際は最初に日本語の論文を書いてそれを英訳するのではなく、最初から英語で書くということを推奨する。日本語と英語では言い回しなどの違いが多いので英訳された文章は時々無意味あるいは不自然な文章になってしまうからである。どうしても日本語をもとに英語論文を書く必要があるのであれば、日本語で書くのは論文のアウトラインのみにとどめておき、それに肉付けしていく形で英語の文章を書いていくことを奨める。

英語研究論文では現在形と過去形の両方を使用しても良いのだが例えば先行文献の記述などではできるだけ型を統一して書いたほうが良い。また従来の英語研究論文では「客観性」を示す意味で主語に複数を使った表現が多く使われてきたと思う。しかし過去 10 年のアメリカの家族研究領域雑誌に掲載された論文を読むと単数主語で書かれたものが少なくない。例えば筆者が一人の場合でも “We” や “Our” という複数の筆者を想像させる言葉遣いをする場合が過去には多かったが最近では “I” や “My” などの単数主語を使った論文が多くなってきている傾向にある。能動態と受動態に関しては従来 “Findings are reported in Table 1.” のような受動態の表現が多かったが、最近では “I report the findings in Table 1.” あるいは “Table 1 reports my findings.” のような能動態の表現が多くなってきているようである。これらの文章の使いわけはあくまでも筆者の好みによるが、能動態と受動態を論文中に混せて記述するということもできる。

結論の部分に含めるのは結果のまとめ、考察、研究の限界、今後の研究の提案などである。インプリケーションは研究結果が政策、教育、カウンセリングやセラピーへどのように役に立つかを述べる部分であるが、必ずしもすべての研究論文に入れる必要はない。しかし雑誌によっては *Family Relations (FR)* のようにインプリケーションを入れることが課されている場合があるので注意すること。*Family Relations* の場合、副タイトルの *Interdisciplinary Journal of Applied Family Studies* が示すように「応用」の部分に重点を置いているために投稿者は論文の最後に必ず *Implications* を入れることが要求されている。

ここでは英語研究論文の構成を理解したうえで、実際に論文を書く場合に使うあるいは使わない英語表現などについての注意点を例示しながら説明する。

最初に目をひくという意味で論文のタイトルは非常に大切である。英語のタイトルを付ける場合はできるだけ長いタイトルを避け、目をひくタイトルにするように心がける。同時に必要のない単語は省くことも重要である。例えば日本語では「父親の育児参加と子どもの社会性に関する考察」とある場合は“Consideration of ~”とするより

英文で比較級を使う場合は必ず比較している対象を書くこと。例えば “Husbands who work shorter hours are likely to participate in housework.” では比較が完了していないので “Husbands who work shorter hours are likely to participate in housework compared to those who work longer hours.” とする。

英語では相関関係として “relate” “correlate” あるいは “associate” などの表現があり、因果関係では “cause” “effect” “affect” あるいは “influence” などがある。*JMF, FR, Journal of Family Issues* などのアメリカのメジャーな家族研究雑誌の編集委員と査読をしてきて気づいたことであるが、因果関係の用語を使う場合は変数間の関係が本当に因果関係なのかを検討する必要がある。つまり横断データを使い重回帰分析をして出た結果の因果関係を強調したいときにはそれなりの理論的な理由がなければならない。良い理由が見つからない場合は因果関係を前提とする重回帰や共分散構造分析などで出た結果であっても言い回しを少々「ソフト」にして相関関係を表す英語を使うことも十分に考えられる。

な言葉と多様性を表す表現

があり、現在は“the”を抜かしたタイトルになっている。この場合はfamilyの前に“the”をつけることによりあたかも「典型的な家族」がいるというニュアンスがあることからゲイやレズビアンあるいはシングルペアレントの家族にとっては排他的な概念になるということが理由であった。最近のJMF論文では“the family”という言葉はほとんど使われておらず家族という言葉を“families”と複数で表している場合が多い。

日本語の論文を書く際の注意事項でもあると思うが、英語の研究論文を書く際は研究者の価値観や感情を含む言葉は可能な限り避ける。例としては次のような文章である。(下線が問題点)

“This is an extremely important finding.”
(価値観を示す表現)

8) カジュアルな英語表現

“So~” → “Therefore~” “Thus~”

“and so on.” → “such as~” “and others.”

“I think~” → “I consider~” “I speculate~”

“Every word counts.”と英語ではいうが，論文中の文字数を無駄に増やさないように，重複した表現を避けたり，少ない単語で表せる言葉を使うなどの細かい努力も必要である。簡単な例としては“look into”という2文字の言い表し方を“examine”“investigate”“study”というような一語にするということである。

III. 英語研究論文の大会報告への 準備と注意点

英語の研究論文を書いた場合、最初に発表がしやすいのは学会主催の大会であろう。大会プログラムの中にもいろいろなセッションがあるが、その中でもポスターセッションは海外の大会への初参加者に奨める。さらに学会によっては大会への参加申し込みが比較的に通しやすいセッションもあるのでそれを知ることも重要である。例えば家族研究発表の場としては世界一の規模を誇るNCFRの場合通常11月に大会が開かれ、申し込みは2月か3月である。NCFRでは申し込み時に自分の研究を発表したい形式とセッションをいくつか選択できるが、ポスターセッションは比較的通りやすい。さらにNCFRのInternationalセッションの場合は参加申し込みが他のセッションに比べて少ないために申し込みが受諾されやすいので特に日本の研究者には奨める。

この項では英語研究論文の大会報告への準備、申し込みなどに関する注意点について(1)大会参加の目的、(2)参加申し込みの準備、(3)大会発表の仕方、(4)発表以外の参加などに分けて説明する。

1. 大会参加の目的

日本での大会参加と同様に海外での大会に参加する目的は主に五つある。第一に自分の最近の研究を発表してさまざまな研究者からコメントをもらうことである。筆者の経験から言うとアメリカの大会では発表自体よりむしろディスカッションの部分で非常に役立つコメントや提言が出され盛り上がることが多い。第二に他の研究者の最近の研究動向を知ることである。この2点に関して特に活発なのがNCFRのPre-ConferenceのTheory and Research Workshopであろう。このプログラムは通常本大会の2日前から始まるが、家族社会学研究者の発表が多く、コメントや意見交換なども積極的に行われる。これは本大会のセッションと違い、プレ・カンファレンスで

は事前に参加者全員に発表者の論文が渡されるために研究発表の時間は非常に短く、ディスカッションの時間にはほとんど費やされることで可能となっている。さらにこのワークショップですでに完成している研究ではなく、むしろ現在進行中の研究を対象にするために今後の研究を進めていくうえで役に立つコメントが多く出される。筆者はNCFRに30年以上参加しているが最初に発表したのがこのワークショップであった。アメリカや諸外国の著名な家族社会学者が参加していたが非常に多くのコメントが出され自身の研究に役に立つ実用的な内容であった。NCFRは学際的な学会であるために、本大会では家族社会学研究者のみではなく、実践の場で活躍している人たちが多く参加するので、特に家族社会学者からのコメントをもらいたい場合はこのワークショップに参加することを推奨する。

第三の目的として重要なのはネットワーキングである。自分の研究で頻繁に参照する論文を執筆した研究者との交流はもちろん大切であるし、他の分野の研究者と交流を図ることは今後の研究に大いに役に立つと思う。アメリカではデータシェアリングが盛んなために、大会での交流から始まりその後データの借用も可能になる場合がある。ちなみにアメリカの調査データの多くはミシガン大学のInstitute for Social ResearchにあるInter-University Consortium for Political and Social Research(ICPSR)でアーカイブされているのでそちらのほうも参照されたい。またコネティカット大学にあるRoper Centerもアーカイブをもち1972年から毎年収集されてきたNational Opinion Research CenterのGeneral Social Surveyデータを含むさまざまなデータを提供している。

会員間の大会でのネットワーキングに関してはいろいろな学会が工夫を凝らしてやっている。例えばNCFRでは大会初参加者のために特別なランチセッションを毎年催しているし、ほかにもメンバー同士の交流をはかるパーティなどが設けら

最後の目的としては他大学のプログラムを知ることである。大学の研究機関のことはもちろん、科目についても知ることができ、研究のみではなく教育面に関しても役に立つ情報を得ることができる。また NCFR の場合はセッションの中に Teaching Workshop などがあり、教育に関するさまざまなトピックを知ることができる。さらに全米社会学会 (American Sociological Association, ASA) や NCFR の場合、講義のシラバスを集めて販売もしている。

大会参加を申し込む場合の準備についてはまず以下のことを知ることから始まる。

- 送るのかなどがある。

- 要旨にせよ、論文にせよ、英語での発表を申し込む場合に知っておきたいのはどのようなプロセスや基準で評価され受諾されるかである。多くの学会の場合、参加申し込み時に提出された要旨や論文は Peer Review される。例えば NCFR の場合は 4~5 ページの研究サマリーを提出するが、参加申し込み時選択したセクションと形式をもとに第一候補のセクションメンバー 2 名が査読をする。査読結果は数量化されその評価が参加申込者にメールで送られる。また査読者のコメントがある場合はそれも送られてくる。もし第一候補のセクションで受諾されない場合は第二候補のセクションへ送られて通常セクションの委員長が決定を下す場合が多い。なお、NCFR の Research & Theory セクションでは大会申し込み時に提出する要旨の書き方を指導してくれる著名な家族社会学者たちで構成されているボランティア Mentor が毎年 10 名くらいいる。その人たちの名前とメールアドレスがセクションメンバーに渡されるので大会参加の応募以前に要旨の書き方などについて指導を仰ぐことができるという非常に便利なプログラムがあるので大いに利用するべきである。

3. 大会発表の仕方

大会での発表に関しては注意事項として (1) 棒読みをできるだけしないこと、(2) 結果発表を中

雑誌を選択し、投稿する際に注意することは以下の点である。

- 能性が大である。

- 6) 雑誌に掲載されている投稿規程 (Instructions for Authors) に目を通しておくのは論文のページ数や図表のプレゼンテーションの仕方、参考文献の書き方を知るうえで非常に重要である。
- 7) 海外の雑誌で掲載したことのある経験者から話を聞くこと。
- 8) 海外の雑誌の HP でそこに掲載されている論文の傾向や最近の投稿に関しての変更を知ることが最低限の必要事項であろう。なお、最近ではほとんどの雑誌でオンライン投稿ができるので海外からの投稿も非常にしやすくなっている。

雑誌を選択するにあたってのランキング作成をする際には主に以下の点に注意したい。

- 1) まず既成の雑誌ランキングが HP 上でいくつかあるのでそれを調べる。しかしこれらを参考にする場合はそのランキングがどのような情報をもとに作成されたのかを知るべきである。
- 2) Social Sciences Citation Index などの引用数を参考に頻繁に引用されている論文はどの雑誌に掲載されたかを調べる。特に自分の研究領域の論文に焦点をあてて調べることを奨める。引用の多い雑誌はそれだけ多くの研究者に読まれているということで知名度も高い。
- 3) 自分の研究領域の研究者の話を参考にする。
- 4) 通常、年最後の雑誌には掲載確率が報告されるのでそこで掲載の難易度がわかる。難易度の高い雑誌はランキング上位に位置していることが多い。

査読結果として通常は一回目査読後の「掲載可」は非常にまれである。「掲載不可」の場合は作成したランキングに基づきできるだけ早く次の雑

誌へ投稿することである。しかしこの場合でも査読者のコメントに基づき修正をする。「掲載不可しかし修正可、再提出可」(Revise & Resubmit, R & R)で戻ってきた場合はアメリカの雑誌の場合、「掲載不可」されたというよりもその雑誌での掲載の可能性がより高くなったとポジティブに思うほうが良い。この場合は査読者のコメントにできるだけ「忠実」に従い修正する。修正対照表では詳細にどのように修正したかを書くこと。どうしても修正不可能な箇所については、その理由(Justification)も詳細に記述することが大切である。アメリカのランキング上位の雑誌ではR & Rが最低3~4回に及ぶものも珍しくないのです。その度に諦めずに修正して再投稿をする。ただし修正はできるだけ迅速に行うことが重要である。

4. その他の推奨事項

英語圏の雑誌での掲載を実現するためにはほかにもいくつかの推奨事項がある。第一には掲載したいと思う雑誌の査読者になることである。海外の多くの雑誌では特に大学院生や若手研究者層に雑誌経験をしてもらいたいという意味で査読者を積極的に募っている。JMFの場合はReviewer-in-Training Program(査読者トレーニングプログラム)をもち、査読者になりたい研究者や院生を4番目の査読者にする(通常は3名の査読者)。トレーニング期間を18カ月として、この期間内に3本の投稿論文を査読してもらう。トレーニング中の査読者はこれら3本の論文への他の査読コメントを受け取り、自分の査読と比較しながら査読のプロセスを学ぶことができる。トレーニング期間が終了した段階で編集長が3本目の査読の質を評価して正式な査読者に任命するというしくみである。JMFの場合、査読の仕方などについてもオンライン上で読むことができるので参考にされたい。査読を経験することにより、それぞれの雑誌が投稿論文をどのような基準で査読し「掲載可・不可」にしているかを学べるので自分の研究論文を投稿する場合に役立つ実用的な知識を得ることができる。

第二に当然のことではあるが、優秀な英語研究論文を書くことはまず英語の論文を読むことから始まると思うので常に海外の雑誌を読むことを推奨する。特に理論の展開方法や先行文献のまとめ方、そして結果の報告の仕方などに焦点をあてて家族社会学系の雑誌を読むことは自身の研究論文を書き、投稿するうえで非常に役に立つと思う。

最後に、推奨する英語圏の家族社会学の雑誌としてはNCFRの学会誌の*Journal of Marriage and Family*と*Family Relations*, さらにNCFRがスポンサーしている*Journal of Family Issues*などがある。*Journal of Comparative Family Studies*は国際比較や諸外国の家族に焦点をあてているので日本の家族研究者にとっては興味をそそられる雑誌であろう。また親子・夫婦関係などの研究のアウトレットとしては*Journal of Social and Personal Relationships*や*Personal Relationships*があげられる。父親研究では5年前に発刊の*Fathering: A Journal of Theory and Research about Men as Parents*がある。高齢者研究の分野では*Journal of Gerontology*, *Social Sciences*や*The Gerontologist*, そして*Research on Aging*があり、ジェンダー研究では*Gender & Society*がある。一般社会学系では*American Sociological Review*, *American Journal of Sociology*, *Social Forces*などがあるが、Pacific Sociological Associationの*Sociological Perspectives*も見落とせない雑誌である。家族の問題を社会的問題と捉える研究のアウトレットとしては*Social Problems Journal*が、また保健医療社会学の研究では*Journal of Health and Social Behavior*が著名な雑誌である。

V. 英語研究論文を執筆、投稿するにあたってのさまざまな情報源

英語で研究論文を執筆して海外の大会で発表したり雑誌に投稿したりする場合に役に立つ情報源を各項目別にまとめる。

執筆で大会を計画する側から見た際の情報が満載されている。)

2) 学会情報 URL と開催時期

<http://www.ncfr.com/> (National Council on Family Relations, NCFR, 11 月)

<http://www.iarr.org/> (International Association for Relationship Research, IARR, 7 月)

<http://www.asanet.org/> (American Sociological Association, ASA, 8 月)

<http://www.pacificsoc.org/> (The Pacific Sociological Association, PSA, 4 月)

<http://www.geron.org/> (The Gerontological Society of America, GSA, 11 月)

<http://www.socwomen.org/> (Sociologists for Women in Society, SWS, 2月と8月)

<http://www.sssp1.org/index.cfm?tsmi=26>
(Society for the Study of Social Problems,
SSSP, 8月)

3. 英語研究論文の投稿に関する URL

1) 雑誌一覧とスポンサー学会

<http://www.ncfr.org/journals/marriage>
[family/home.asp](http://www.ncfr.org/journals/marriage) (*Journal of Marriage and*
Family, NCFR)

<http://www.ncfr.org/journals/family-relations/home.asp> (*Family Relations*, NCFR)
<http://jfi.sagepub.com/> (*Journal of Family Issues*, NCFR)

<http://www.soci.ucalgary.ca/jcfs/> (*Journal of Comparative Family Studies*)
<http://mensstudies.com/newlook/online/>

[page3/page3.php?cover=FR.jpg&cat=pur
&vart=j](http://page3/page3.php?cover=FR.jpg&cat=pur&vart=j) (*Fathering: A Journal of Theory and
Research about Men as Parents*)

<http://www.sagepub.com/journalsProdDesc.nav?prodId=Journal200790> (*Journal of Social and Personal Relationships*, IARR)

<http://www.sagepub.com/journalsProdDesc.nav?prodId=Journal200790> (*Personal Relationships*, IARR)

(NCFR 大会を長年担当してきた Winter 氏の

[http://www.ncfr.org/journals/marriage family/review/become.asp](http://www.ncfr.org/journals/marriage_family/review/become.asp) (JMF Reviewer-in-Training Program, 査読者トレーニングプロ